

日清戦争時における捕虜処遇の問題 —— 松山における新聞報道を中心に ——

梶 原 克 彦

論 説

日清戦争時における捕虜処遇の問題 —— 松山における新聞報道を中心に ——

梶 原 克 彦

目 次

はじめに

1. 捕虜処遇と文明国の意識 —— 国際法をめぐる
 2. 現地における捕虜処遇の問題
 3. 在留清国民間人をめぐる処遇
 4. 松山における清国兵捕虜
- むすびにかえて —— 中国と日本との関係

は じ め に

日清戦争は1894（明治27）年7月25日に豊島沖の日清両艦隊の海戦で始まり、8月1日の宣戦布告を経て翌年4月17日の講和条約（下関条約）調印をもって終了する近代日本初の対外戦争であった¹⁾。この戦争に伴い、およそ1,700名の清国兵捕虜が日本の管理下に置かれた。その内700名ほどが現地（盛京省〔現在は遼寧省〕海城）で、そして約1,000人が佐倉（千葉県）、高崎（群馬県）、東京、豊橋（愛知県）、名古屋、大津、大阪、広島、松山の9ヶ所に分散収容された。近代日本の捕虜処遇ということ言えば、戊辰戦争や西南戦争での捕虜取り扱いからその歴史が始まるということになるだろうが、外国人を

捕虜として処遇した事例としては、この日清戦争時における捕虜処遇をもって嚆矢とする。

さて近代日本の捕虜管理問題のうち、明治・大正期については、日露戦争および第一次世界大戦期（日独戦争）に関して多くの研究が進められてきた。これに対して、日清戦争時の捕虜管理問題については相対的に研究の蓄積が少ない。日清戦争時の捕虜管理の一般的状況や全国的な状況について言及した先行研究には²⁾、長谷川（1962）、吹浦（1990）、檜山（1997）、秦（1998）、森（2005）、内海（2005）、大谷（2014）、がある。これらの研究では、国内での処遇について、寺院における労役なき収容の様子や、文明国としての処遇に意を払いながらも朝野における蔑視感情を含んだ対応の存在などが指摘されている。また戦地での処遇を巡っては、国際法に基づく行動が求められた中で捕虜虐待や旅順虐殺事件が生起していたことがあり、その背景に清国人に対する報復感情だけでない、捕虜への否定的な考えや軍の構造的問題があったことが示されている。中国語での文献としては、宗（2012）が日清戦争全般に関する中で捕虜処遇に言及しているが、その叙述は主として日本側の史料に基づいていることもあり、上記の先行研究と内容をほぼ等しくしている。

これら清国兵に対する一般的な捕虜処遇の研究がある一方で、各地方における具体的な処遇の様子を取り上げた研究も僅かながら存在している。飯野（1997）は高崎の事例に言及し、上記の先行研究の中でも、森（2005）は名古屋及び豊橋の事例を明らかにしている。さらに松山での事例については、才神（1969）の古典的な研究に加えて、阿部（2019）の研究が松山へ至る捕虜移送や捕虜をめぐる松山市民の様子を描いており、処遇の一端が解明されている³⁾。

このように日清戦争についても先行研究が積み重ねられてきたけれども、日露戦争時のロシア兵捕虜および第一次世界大戦時のドイツ兵・オーストリア＝ハンガリー兵捕虜の処遇が数多く明らかにされている状況に比べれば、日清戦争時の捕虜処遇をめぐる未解明の部分が多いといえよう。特に、前者では捕虜処遇に関する概観に加えて、地方史の文脈から各収容所に関する数多くの論考が蓄積されてきたのに対して、後者はこの点、質量共に乏しいという

のが現状である。こうした日清戦争時の捕虜処遇に関する研究停滞は、その理由の一端として、阿部も指摘するように、公的な史料の面で日露戦争と第一次世界大戦に比して乏しいという点がある。こうした研究状況に鑑みて、本稿では予備考察として、松山収容所を題材に捕虜収容とこれをめぐる地域の状況を掘り下げていく。その際、当時愛媛県で発行されていた『海南新聞』と『宇和島新聞』を活用し、広島県で発行されていた『芸備日日新聞』、『中國新聞』の記事で適宜補いながら、いくつかのトピックにまとめて考察する。これらの新聞記事では、清国兵捕虜たちが松山収容所へ至る過程や同収容所での様子、捕虜処遇をめぐる日本側の姿勢、さらには松山以外に設置された収容所の様子など、従来の研究では論じられることのなかった多くの点が報じられている。以下ではその幾つかを採り上げ、近代日本における初めての外国人捕虜処遇とその様子を検討していきたい。

1. 捕虜処遇と文明国の意識 ―― 国際法をめぐる

日露戦争・第一次世界大戦（日独戦争）における捕虜の厚遇は夙に指摘されてきたが、そのメルクマールは人道主義と国際法の順守にあった。これらに先立つ日清戦争時の捕虜処遇においても、当事者たちにその重要性は強く意識されていたようである。『海南新聞』でも非常に早くから国際法に基づく捕虜処遇方針が報道されており、1894（明治27）年8月1日付記事では、無用の拘束は禁じられていること、衣食は日本軍と同等にすべきこと、軍事に関する労働以外は使役してもよいこと、その労賃を管理費に回すこともできること、について触れられている。同紙8月3日にも捕虜の処遇について、歴史的経緯を踏まえて説明を試みている。同様の内容をより詳しく取り扱っているのが『宇和島新聞』8月6日付の記事「戦事の俘虜は如何すべきや」である。操江号の乗組員80余名が捕虜になり、その処遇方法を論じる中で、欧州でも古代から近世にかけて捕虜は捕獲した者の財産であり、殺害も奴隷としての売却もその意のままであったが、「現今の慣例は降参したる人物の生命を助け敵国の為め

に捕獲せられたる我兵の俘虜と之を交換し若くは贖金を敵より受取りて之を敵に引渡すにある、且つ俘虜として敵を我軍に捕獲し置く間は其国費を以て普通の衣食を之に供給するの例なり」と、今や捕虜の適切な処遇が必須となっていることを述べている。とはいえ、「文明国の戦争に於て尚ほ俘虜の薄待を免れざる者と見え俘虜交換の時に於て其の能く戦闘力を存する者は殆ど稀なりといふ」と国際法が実際にはそこまで遵守されていない点を指摘している。国際法の遵守が徹底していないことは、ついで紹介された宣誓解放の例でも共通しており、解放されたのち宣誓に反して再度従軍した捕虜の話から、文明国であっても国際法が形ばかりのものになることも読者は知るに及ぶことになる。必ずしも国際法を遵守しているわけではなく、また相手がこのルールを遵守しなければこちらも遵守する必要のないことを述べたうえで、「俘虜の待遇は固より万国の刮目する処なれば最も鄭重を加ふるの必要ある者と云はざるを得ず」と結んでいる。

国際法を守るためのいわば手段としての捕虜の適切な処遇は、ややともすれば捕虜の処遇を負担だと言う感覚を抱かせていたと思われる。不本意ながらも捕虜を適切に処遇しなければならないという感覚は、先に触れた『海南新聞』記事において、辮髪を切って種々の活動に使役でき、ひいては「坐食の不利」を補う可能性に言及していることから察せられる。捕虜をして「ただ飯食い」や「金喰い虫」と看做す雰囲気は、他の記事にも漂っており、同紙の明治27年9月29日付「俘虜の扱ひ」では、「俘虜は実に厄介物なり。此厄介物を引受けて無駄に食を与ふる程迷惑なるものはあらじ聞く。今回平壤に於て擒虜にしたるは五百名に及べりき。若し今後の戦勝毎に多数の擒虜あらば衣食の給与運搬等の始末に困ることならん」と極めて直截な口吻で語っている。

同記事では、「ブッセル国際会議」(ブラッセル〔ブリュッセル〕会議)の決議を紹介している。日本を含め、結局、どの国も調印しなかったため「条約」とはならなかったものの⁴⁾、こうした記事を通じて、読者は、国際法に基づく捕虜処遇の基盤が同決議に据えられており、捕虜の労役も一定の条件で国際法上認められていることを認識したであろう。もっとも、この記事の書き出しは上

述の通りにも、捕虜が実に厄介者で、無駄に食を与えることが迷惑だとする内容であり、「以上は万国の必らず守るべき公法ならざれば、我国の之れを採用すると否とは任意なれども将来文明国の慣例ともなるべきものなり。該俘虜は之を朝鮮若くは其他適応の工事等に使用する甚妙ならんか」と結んでいる。このあたりに、捕虜の人道的処遇を努力義務のように捉え、その負担を労役で相殺⁵⁾しようとする考えが顕著であり、当時の捕虜処遇をめぐる「ホンネ」と「タテマエ」の姿勢が透けてみえよう。

2. 現地における捕虜処遇の問題

近代日本の捕虜処遇問題をめぐっては、明治・大正期の厚遇と昭和期の酷遇との対照性という文脈の中で議論が形成されてきた、といってもよいだろう。そのため、従来、明治・大正期については「国際交流」のようなエピソードが注目されるのに対して、昭和期に関しては虐待や強制労働の事例が採り上げられ、これはそれぞれの時代における捕虜処遇のステレオタイプのイメージを生み出すことで、ともすれば実相を捉えにくくしてしまう憾みがあった⁶⁾。その一方で、昭和期に見せる残虐な姿勢のルーツないし近代日本の捕虜処遇に関する基本姿勢といったものを明治・大正期におけるそれの中にも遡って確認したり、「国際交流」の裏面の様子を調査したり、といった考察も存在している。

日清戦争についていえば、本土での処遇は概して国際的なルールに基づいていたとされるものの、現地、とりわけ本格的な収容所で管理する以前の捕虜処遇については、捕虜殺害といった事態の存在から、国際的ルールを順守する姿勢というメッキが剥がれたとするような描写も多い。例えば、檜山（1997）では、平壤会戦後に清国兵捕虜 38 名が斬首された事件⁷⁾を踏まえて、「日清戦争では文明国の軍隊としての模範を示さんと、捕虜の取扱いについては、抑留地では被服を調整支給し、負傷者や罹病者へは適宜治療をするなど、かなり丁寧になされていた。日本は、西南戦争での博愛社の経験と、万国赤十字条約に加盟して文明国の認知を受けんと躍起になっていたが、平壤における捕虜の『打

ちくび』は、それらが借り物であったことをしめしたのもでもあろう⁸⁾」と指摘されている。

この意見を裏付ける事例は他にも存在しており、その一つが1894（明治27）年8月12日の『宇和島新聞』に掲載された書面である⁹⁾。これは、西宇和郡出身者が京城から故郷の新聞社へ郵送した文書であり、「成歓・牙山の戦い」での戦闘の様子はもとより、捕虜処遇の姿も確認できる内容となっている。そこに、「成歓の民家に隠伏せし敵の兵士等十余名を生擒して之を銃殺又は斬殺せり。予が到りし日は〔七月〕三十一日なるが、此の日又た一人を銃殺、一人を生擒の儘捕縛し居れり。聞く所に依れば此一人は荷物の運搬上夫卒不足を告ぐるを以て龍山まで荷物を背負せ而して龍山に到て斬殺すると云へり云々」とする記述があり、捕虜の殺害が繰り返行われていた様や、輜重運搬にあたる軍夫の不足を捕虜の使役に補っていたことが分かる¹⁰⁾。捕虜の殺害といい、捕虜の労役といい、現地での捕虜管理は国内でのそれとは随分と異なっていたといえる。

ところでこうした記事内容は、もちろん戦場や現地における捕虜虐待の事実やその考察の契機をもたらす点でも重要であるが、一方で、記事の取り上げ方自体にも当時の様子が窺える。すなわち、こういった捕虜殺害というニュースを報じるあたりに、捕虜処遇に関して十年後の日露戦争時に、そして二十年後の日独戦争（第一次世界大戦）時にロシアやドイツといった交戦国に示したデリケートさは感じられない、という点である。もちろん厚遇をもって知られるロシア兵捕虜への対応でも、現地では斬首が行われたり、大量殺戮があったりしたことが知られているが¹¹⁾その時に比べると、こうした行為が国際社会で大きな問題を引き起こすことへの危機感は、日清戦争の場合、清国および清国兵への侮蔑感情も加わってか¹²⁾相対的に希薄であったといえるかもしれない。

もっとも、このことは国際世論への関心そのものが欠如していたことを意味しない。例えば、『芸備日日新聞』では明治27年10月27日から「朝鮮の近情一斑」とする記事が連載されており、これはイギリスのジャーナリストであるヘンリー・ノーマン（Henry Norman）の英文記事を翻訳したものであった¹³⁾

この連載は、朝鮮の混乱、不安定さに加えて、これを清が統治することの困難を指摘するものであり、概して文明の尺度から両国の停滞を、そして翻って日本の進歩を称賛する内容からなっていた。そこでは捕虜の処遇についても、日本に捕獲された清国兵は幸いであるといった事が記されており、つまりは英国ジャーナリストの口吻を借りて日本の捕虜処遇のすばらしさを喧伝する、いわばプロパガンダの役割を果たす記事の掲載であった¹⁴⁾

また、明治27年11月における旅順虐殺事件への日本側の対応にも、そうした国際世論への反応と対処が見て取れよう¹⁵⁾ もっとも、実際に国際法を順守するか否かという問題とは別に、国際法順守ということにかけられる真剣さの度合いは後の日露戦争、日独戦争の時分と比べると甘いという印象を受ける。どちらかといえば、紙上では、清国兵による残虐行為がしばしば報じられており、その報復としての正当性が論じられている向きがある。この清国兵による「不法」な行いについては、残虐行為の報道の他にも、捕虜殺害が行われていた節のあることは先行研究でも指摘されてきたが、講和条約締結後、捕虜交換で明らかになった日本人捕虜の数については、そもそも何名が捕虜とされたのか正確な情報がなく、最終的に郷田愛吉1名（他は軍夫10名）のみが交換されたことにも現れている。

一方、旅順虐殺事件には、国際法に基づく処遇がかりそめの対応に過ぎないのか否かという点に終始せず、戦場での捕虜管理に付き纏う難しさという問題も含まれている。同事件の報道がアメリカの『ニューヨーク・ワールド』やイギリスの『タイムズ』でなされたが、この報道をめぐり『海南新聞』では1895（明治28）年3月1日に「外人の眼に映ずる日本（所謂旅順虐殺と英国新聞）」と題する記事を掲載した。ここでは、『タイムズ』が「日本軍が清軍の兵士と人民を区別せざりしことの無理ならざるを認め」つつも、「敵兵なりとて妄に之を殺戮するは蛮行なり」と断じ、広島予備病院で捕虜に医療を施したことについても「広島に於ける虚飾は旅順の実践に於て剥落せりと」論じていること、他の英字新聞も大同小異であること、しかし『スピーカー』紙はひとり虐殺の事実を日本人の野蛮に帰すことなく人間一般の弱さにその原因を求めたこと、

が指摘されている。さらに同紙では同月 30 日に『タイムズ』の修正記事として「旅順虐殺の誤謬を自認す」が掲載され、その翻訳記事が『海南新聞』に掲載された。この記事では「日本兵の殺戮したるは正式の支那兵と云ふを得ざるも亦確に日本兵の敵たるべき人民にして一万五千の支那兵が日本軍の戦闘線を越え悉く落ち延び得べき道理なく其多数は必ず市街に潜みたるならんれば、殺戮を蒙りしは是等の敗兵なるべし。現に予は一日千を以て数ふべき軍服の処々に打ち捨てあるを目撃したる程なれば実際戦闘者と非戦闘者とを区別するは到底なし得べからざることなりしならん」とし、「若しも敵軍が文明国間に行はるゝ戦法を遵奉せず或は市民が危険なる武器を蔵匿することあらば一人を罪して万人を懲らすの方法を執るの外、道あるべからず」とある。もちろんこの論説を報道が引用した意図は、旅順での虐殺事件を報復感情によって正当化するだけでなく、戦闘での避けがたい事象とすることにもあったと思われる。しかし、兵士と民間人・非戦闘員との区別が困難になるという点は単なる弁明に止まらず、市街地での戦闘には絶えず浮上するものといつてよい。この問題は、大陸での戦闘終了後の台湾制圧でも出現しており、台湾平定に際して派兵した作戦においても捕虜が発生し、同様の問題に悩まされていた様子がその後の記事から窺える。戦地での捕虜処遇は、銃後でのそれとはまた異なっており、生じる問題も国際法の等閑視や捕虜そのものへの蔑視感情だけに還元されない、捕虜管理の困難を示している。

3. 在留清国民間人をめぐる処遇

清国兵捕虜の処遇は国際法に基づき人道に配慮して行われることが公言された一方、日本在留の清国人民間人についても、その安全や権利が保護されることが確認されており、捕虜同様「厚遇」の状況が指摘できるだろう。戦争は兵士の前線への投入という新たな「人の移動」を生じさせ、捕虜という存在はその一つのあり方であるが、対して、平時における「人の移動」の結果、在留民間人は開戦時に「敵国外国人」の処遇という問題を引き起こす。日清戦争時に

も敵国民間人の処遇というテーマが浮上し、『海南新聞』でも開戦時、とくに1894（明治27）年8月8日の記事（「清人取扱の勅令」）で清国人の保護法が紹介されている。

去五日官報号外にて公布されし清国人取扱勅令は左の如し

第一条 清国臣民は本令の規定する所に従ひ帝国内從來居住を許されたる場所に於て身体財産の保護を受け向後も引続き居住し且其他に於て平和適法の職業に従事することを得
但帝国裁判^マ所の管轄に服従すべし

第二条 前条に依り帝国内に居住する所の清国臣民は本令發布の日より二十日以内にその居住地の府県知事申出で住所職業氏名の登録を請ふべし

第三条 府県知事は第二条の登録を受けたる清国[□]民に対し登録證書を交付すべし

第四条 第二条登録済の清国臣民は其居住地を移転することを得
但此の場合に於ては先づ其登録證書に現居留地府県知事の裏書を受け新居住地へ到着後三日間に此地府県知事に申出で更に第[□]条の登録を受くべし

第五条 府県知事は本令規定の登録を請はざる清国臣民を帝国版図外に退去せしむることを得

第六条 清国臣民にして帝国の利益を害する所為ある者、秩序を紊乱する者又は以上の嫌疑ある者は各法令に依りて処分するの外府県知事は尚之れを帝国版図外に退去せしむることを得

第七条 本令は帝国官庁并に臣民に雇用せる、清国人にも適用す

第八条 本令は交戦上の目的の為に帝国軍衛より在留清国臣民に対し発する命令処分に関係することなし

第九条 本令發布の後に於て清国臣民の帝国版図内に入ることを許すは府県知事を経て内務大臣の特許を得たるものに限る

第十条 本令は発布の日より施行す

ところで、第一次世界大戦時には交戦国間や中立国でも民間人の拘禁や抑留が生じ、日独間でも民間人の処遇が問題となったが、この日清戦争時の清国人への厚遇の記憶は在留ドイツ人にも受け継がれていくものとなる¹⁶⁾

もっともこうした清国民間人に対する厚遇と表裏をなして、スパイ嫌疑などで逮捕された民間人も存在した¹⁷⁾ 清国人保護法を説明した記事と同日付で清国人逮捕の記事が掲載されており¹⁸⁾ この動きには戦時の両国間関係が色濃く反映されている。また『宇和島新聞』の明治27年9月8日付の記事「清兵に扮する俳優殴打さる」には、東京浅草座の川上一座が日清戦争を演じていた最中、清国兵に扮した者が殴打されたとの記事が掲載されており、市井における敵愾心の高まりが察せられると同時に、抽象的な「清国人」というカテゴリーが成立し、これに帰属する者は皆すべて敵とみなす、国民戦争に特有の様相が窺える。

第一次世界大戦時には、こういった敵国人の処遇ではしばしば「オウム返し戦略」が採られ、厚遇には厚遇で、酷遇には酷遇で応えるという「応酬」が見られた。同大戦時の交戦国間ではそのような姿勢が認められたのだが、日清戦争時の日本の姿勢には、1894（明治27）年8月17日、19日の『海南新聞』での報道に鑑みれば、日本側の片務的性格を意識していた様子が見て取れる。ただ当時の清での邦人に対する様々な暴行や掠奪事件、商船拿捕、などに対する憤りは強く、日本側がこの一方的な厚遇を諒とした訳ではないことは察せられる。

4. 松山における清国兵捕虜

松山では、市内中心部松山城の北にあった城北練兵場にほど近い長建寺を「俘虜廠舎」とし、約百名の清国捕虜たちが解放されるまで、長い場合はおよそ9ヶ月を同地で過ごすことになった¹⁹⁾ 長建寺はその後、日露戦争、日独戦争

(第一次世界大戦)においてもロシア兵捕虜およびドイツ兵捕虜を収容することになるように、松山は近代以降、捕虜収容所の街といった様相を帯びる。これは松山が、戦場との地理的近接、捕虜輸送の簡便さ、連隊の所在地、気候の温暖さなどの条件を有していたからだった。「捕虜の街松山」としての歴史はこの日清戦争での捕虜収容から始まる。

さて松山は、日清戦争、日露戦争、日独戦争とほぼ十年ごとに捕虜を迎えていたわけであるが、とりわけ日露戦争時には、松山に収容された一時4,000人以上のロシア兵捕虜が生み出した「捕虜景気」もあり、捕虜の来松に寄せる市民の関心も非常に高かったことが指摘されてきた。日独戦争(第一次世界大戦)の際にも、ドイツ兵捕虜がやって来るとなると、ロシア兵捕虜の記憶も残る街では、経済や文化の両面からやはり高い関心をもってその報は受けとめられた。確かにロシア兵捕虜と比べると松山収容のドイツ兵捕虜は約400人と規模が小さく、また自由散歩が禁じられたこともあり、市民との接触が少なく経済効果も相対的に小さかったため、日露戦争時とは異なっていたけれども、当初ドイツ兵捕虜へ興味を持った多くの松山市民の姿は確認できる。

これら二つの捕虜収容に対して、例えば才神時雄『松山収容所』では、日清戦争時には捕虜への市民の関心が高くなかったとされている。確かに明治27年9月25日付『海南新聞』には、操江号捕虜の来松に際して、捕虜が順守すべき項目を紹介する記事があるものの、淡々と事実が記され、そこに高揚した様子は伝わってこない。しかし、9月20日付『芸備日日新聞』の記事からはやはり市民の関心の高さが窺える。記事によれば、「第五師団に在りたる清国の俘虜八十四名(内将校十名、下士官以下七十四名)去十四日松山に押送せられしことは已に記したり右俘虜は汽船西予丸に乗せられ護送兵二十名附添ひ居り同夜十時四十分愛媛県和気郡高浜港に着したり。松山衛戍の兵士二十名、警察部より出張せる警部二名、巡查五十名と三津警察署の巡查十名之を受取りて臨時汽車にて古町停車場に着し夫より夫の和気郡御幸村大字山越なる長建寺に押送したり。松山近傍の人民其様を覩んとて雲霞の如く高浜に集りたれば非常に雑踏せり。彼等は敵国に俘虜となりしにも似ず何事か面白可笑しく打語ひ

つゝ、引かれ行き毫も心配なきものゝ如くなりしとぞ気楽なる者共と謂ふべし」とあり、捕虜到着を待ちわびる人々が港に押し寄せる光景は、日清戦争以後も松山で繰り返されるそれである²⁰⁾ 1894（明治27）年10月5日にも「俘虜話」として細かに捕虜の様子が紹介されている。その後、平壤・九連の戦いでの捕虜を11月に迎えることになるが、この時は捕虜が松山に到着した時の様子も詳細に伝えられている。11月11日付『海南新聞』の記事によると、400～500人の群衆が捕虜を見るために押し寄せ、市内に入るとその数は2,000～3,000人に膨れ上がり、押し合い圧し合いしていた様子が伝えられている。したがって才神が言うよりも捕虜への関心は高かったといえよう。もっとも、捕虜に関する新聞記事の常として、収容前および収容開始時に関心がピークに達し、その後逡巡していくものだが、日清戦争時のそれも例に洩れない。その一方で、捕虜収容所を慰問・訪問したという記事は収容期間全体を通じて散見され、そのメンバーも赤十字社員、議員、兵士など様々である。

とまれ、『海南新聞』1894（明治27）年11月25日、28日の両日に亘り掲載された「山越の捕虜廠舎」では、海軍捕虜兵と陸軍捕虜兵との不仲などを含めて、長建寺における捕虜たちの様子や特徴など興味深い内容が細かに紹介されている。この記事を通して、ロシア兵捕虜・ドイツ兵捕虜の時とは異なる清国兵捕虜の生活の姿とそれを取り巻く日本側の様子が窺い知ることができるだろう。以下少々長くなるが松山収容所での清国兵捕虜の様子を伝える貴重な資料であるためここに引用することとする。

山越の捕虜廠舎

清将捕虜十一名の松山に來り山越長建寺の廠舎に入りしは去十日の午前なり。當時の狀況之を載せて十一日の本紙にある然るに今同捕虜に従ふて來松せし第五師団付通訳官彭城氏が當時の実況を復命したる書を得たり。重複に渉る處あるべきも載せて當時の詳狀を報ずる事となせり。

一 譚以下の受渡

去十一月九日正午過ぎ大多和兵站部司令官広島尾長村瑞泉寺捕虜廠舎に

臨み、譚以下一同を斉列せしめ午後二時を以て松山へ護送致すに付各自出發の用意可致旨口達あり、了て又た追々寒冷□赴くを以て各位時氣相厭ひ專一に存する旨を陳べらる。譚以下一同其厚意を拜謝し敬礼す。此時譚清遠は我等未だ貴国の礼儀を知らず如何に答礼して宜しきや、將又た今般非常の御尽力に預り感謝に堪へざる旨を述ぶ。

同四時宇品發、吳港音戸瀬戸を経て七時三津浜に着すれば、松山捕虜廠舎管理員野口歩兵大尉は通訳官一名軍曹一名其他護衛の兵士を引率して來らる。旅舎に於て譚以下を斉列せしめ一応人員の点呼を為し、茲に広島より護送し來りたる衛兵の任務を解く。受渡の式全く終りて管理員野口大尉は捕虜に向ひ訓示して曰く、本官は則捕虜管理員にして将来厚く待遇を行ふ心得なり。是れ皆我 天皇陛下の御仁徳に因り斯くの如く恩典を以て特に下官等に待遇の事を命ぜられたるものなれば一同安堵致すべしと。譚以下一同例の如く敬礼拜謝す。

二 途上及び旅舎

譚以下三津浜に着するや管理員野口大尉は当夜三津浜に一泊し、明朝一番列車を以て松山に護送すべき旨を命ぜらる。旅舎は久保田なる家にして海に沿ひ門を構へ、清淨高潔なる一大旅舎となす。此夜は一行を待受け門頭には旭章の国旗を交叉し其兩側には日の丸を打ちたる高張提灯を点じ更に一層の風儀を添へたり。階段を□ち、小庭を隔てたる客室に入る、譚以下一同此珍客然たる厚遇を受け美麗なる客室に誘はれ、頗る肝膽を潰ぶしたりと見へ相見て呆然自失、其状幾たびか人をして抱腹絶倒に堪へざらしめたり。就中晚餐を与ふるの前茶菓子を供せられたる時の如き、珍客は殆んど其恒心を放散せしめられたり。茶菓子は上等のカステーラにして小楊子を挿し折紙に載せ、一人毎に二片宛を出したるに、珍客は孰れも云ひ合せたる如く一片づゝを喫し、他の一片は之を残して喫せざりし。之れ実に小児の遠慮と一般忍んで之を為したるものか。抑も又以外の厚遇に咽び喉を下る能はざりしものか、晚餐の如きも亦た其挙動同一の筆法にいでたるものあり。此の如きは鄙汚貪吝なる支那人の常としては決して之れなき事

なり。旅舎の待遇上の如く鄭重なりしを以て、彭城通訳官は美麗なる寝具を出さんことを恐れ、野口大尉に注意して粗末なる布団を出さしめたり。之れ珍客の頭髮衣服無量無数の半風子を生育し居ればなり。

船を辞し三津浜に上陸し旅舎久保田に至るの間、及び松山停車場より捕虜廠舎に至る間は、男女例の如く群衆繞観す、護衛の兵士及び警察官は之を制して両側に開かしむ、群衆の輩敢て一言の罵詈誹謗を放つものなきは勿論、左右に整列し肅として紛乱せざるを見、譚以下一同□に眼を廻らし政教の行届きたるに感嘆禁ずる能はざりき。三津浜よりは一同腕車に乗りて停車場に着し、中等客車一輛を命じ野口大尉、彭城訳官、松山附訳官と共に之に搭せしむ、彼等が此厚遇に驚愕して前後を忘れたるの状は読者随意に之を想像せよ。

三 廠舎規則を論ず

三津浜を発して松山に向ふに先だち、管理員野口大尉は捕虜廠舎規則を示し、彭城訳官をして譚以下一同に諭さしめたり。訳官は一応原文を毆陽屏南に示したるに屏南は能く其意味を解するを得、其中三四箇所に就て弁解教示したには、屏南は更に譚以下一同に読み聞かせ篤と了解せしめたり。此屏南は電信技手にして英語を能くし、瑞泉寺に在りしとき、彭城氏に就て片仮名を習得て斯くは原文を読みたるならん。一同が了解を表したる後訳官は付け加へて規則の重んずべきこと、如何なる事故あるも此の意を失ふべからざることを説示したり。

四 捕虜廠舎の概況

廠舎は和氣郡御幸村大字山越長建寺に在り。古町停車場を距る七八町許、廠舎の門は番兵と巡査とに依りて嚴重に警固せられ、門を過ぎて凡そ十歩強、高さ三間に余る竹柵を以て圍繞す。門の正面は炊事場と本堂に夾まりて衛兵所の設けあり。柵の外部即ち門の内面右手に一小樓あり。之を捕虜管理員詰所となす。又転じて衛兵所の前より炊事場の前を竹柵に沿ひ進み行けば、一小池を蓄ふ橋あり、之に架す。橋の前面と右方は假山にして紅楓青松、間錯繁茂風光殊に佳なり。時に橋を渡たれる支那人を眺むるに於

ては、宛然たる一幅の文人画を展するの思ひあり。何ぞ図らん此の書図景の裏純然たる支那的の一社会を包蔵せんとは。

橋の右手は寺院の座敷にして操江号捕虜の士官を容る。次に一空室を隔て一二小室藁蒲団毛布等を具へたるあり。譚以下唐，王，派，欧五名を其一に，他の六名を其二に分舎せしめたり。

五 新旧捕虜の対面

野口大尉は譚以下十一名の新捕虜を本堂の前に導き，此処にて操江号乗組水夫一同を斉列し互に敬礼を行はしめ，今後互に和順すべき旨を諭示さる。本座敷には将校を斉列して出迎へ相敬する前の如し。然るに此水夫中牙山陸兵の捕虜三名あり。常に水夫の為に傍看に堪へざる程の虐待を受け恰かも夜叉の継子に於ける如く，管理員一同困却を極めたる事も多かりしとか。此三名は譚以下の陸軍士官を見るや，□喜雀躍父母の再生にでも遭ひしが如く殆んど人事を忘れたり。野口大尉の如きも啻に彼等三人の幸福のみならず，以後取扱上幾多の困難を免かるべしと打ち喜べり。嗚呼何等の社会ぞや，古より呉越も同舟とこそは言はずや。同しく天涯に俘囚となりながら多を以て少を困むること此の如く，新来のものに対しては却て懇願すべきの命を他国人に発せしむ。堯舜の道，孔孟の教も今は何の辺に消へ失せしものか。

六 廠舎現在捕虜

操江号乗組員船長以下八十三名中一名本月二日病死，現在員八十二名（牙山捕虜を含む）に加ふるに此譚清遠以下十一名を算入するときは九十三名となるべし。此の内少年八名あり（十二歳乃至十六歳）給仕の事に任じ諸事周旋し，譚以下の来会したるより又た半数交迭を以て毎日同人等にも給仕することに命ぜられたり。操江号乗組将校の官職姓名住所等は左の如し。

浙江省寧波府人，天津東門外僑住

船主（船長） 王 永 發

同省同府鄞城内住

大夫（一等運転手） 孫 茂 盛

同省同府鄞鄉村住

二夫（二等運転手） 徐 起 □

同省同府天津小関口僑住

三夫（三等運転手） 王 生 才

同省同府上海鉄馬路僑住

管事（事務長） 方 長 春

同省同府天津紫竹林僑住

大俵（一等機関士） 石 徳 行

同省定海庁人旅順口僑住

二俵（二等運転手） 色 振 瑞

同省寧波府人鄞東鄉村住

三俵（三等運転手） 鮑 忠 林

同省紹興府人東村住

書吏（書記） 徐 恵 生

同省同府鄞城内住

書吏 陳 楽 郷

以上皆運漕船組織なるを以て海軍々人の官命を帯びざるなり。

七 将校の所有金

右十名の捕虜将校は船中にて蓄積したる（恐らくは之れ破裂弾の装薬等より得たるもの）多額の金員を有せり。而して其性質は共有金の如く一同の権利に属す。今其金員の類及換金額を挙ぐれば、

- 一、洋銀 千三百弗 二、馬蹄銀 二百両
- 三、碎銀 十八塊 四、小包洋銀 百十九弗
- 五、小銀貨 十五弗

右五種之を我銀貨に換算するときは凡そ一千七八百円のものなり。然れども其中七百円許は已に消費したり

此の如く彼等は共有金ありて随意に種々の嗜好品を要求するが故に、万

事不自由を感ずること決して之れなきも、此回護送されたる譚以下十一人に在りては全く所有金なしと云ふも不可なきに程にて、悉皆集め来るも五円内外に在り、操江号の一兵卒にも劣らざるを得ず、金は力、而かも残忍酷薄にして情誼を知らざる支那人間に於ては、其苦痛察するに余ある所なり。

八 捕虜の起居動作

操江号捕虜は海員として粗暴なる生活を送りたる為めか、一般に其動作の活発なるを覚え、無頓着平気は元来支那人の特性なれども、此輩は嘗て無頓着平気なるのみならず、士卒一同幾分か進取奮励の気力あるが如く、譚以下の新来者が日本語の研究を為せるを聞き、直に其室に至り彭城氏が与へたる会話書、片仮名字彙等を借り受け、亦た切に彭城氏が留まりて示教を垂れんことを懇請せりと云ふ。九十三名中十四五名の軽症患者あり。船長王永發亦た在船中より儻麻質斯に罹り困難せしが未だ全快に至らずして、医官の療養を受け居れるも決して重症にあらず、只だ歩行の際少しく膝関節の不能を覚へ腹部及び四肢に麻痺を感ずるのみと云ふ。然れども王は官給の外自費を以て鉄製西洋寝台を新調し、日本蚊帳を以て帷となし種々些末の点末も行届きたる手当を成せり。之れ皆な其金力に依りて得る所となす。

九 官給私調の寝具

我皇聖明の徳沢彼れ捕虜一名に給するに藁布団一枚、毛布四枚、敷布二枚の寝具あり。別に寝具の給与は有らざるを以て、彼輩は各自藁布団を畳上に並べ其周囲を人々の占有とし布団の後部には敷布及び毛布等を収め、一切の所有品を□此下に備へ付け居れり。士官室は別に床間あるを以て雑品は之に安置したり。然るに彼れ豚尾、其国俗飽食暖衣逸居の贅沢なる習慣を以て生活するが故に、此十分なる官給の寝具に満足せず、其囊中の暖かなるに任せ各自綿を購ひ来り、毛布と毛布の間に挟みて見事なる上看布団となし、或は其上を紀州子ルにて覆ひ、一層の贅沢なることをなし居るものあり、驚くべき次第ならずや。之を近くれば狎れ之を遠くれば怨む

女子と一般なる上人の心根、西人の所謂奴隸的根性惡むべきが如くにして、
 其実は憫むべき亡国の蛮民と云ふ外なきなり。

むすびにかえて——中国と日本との関係

捕虜収容所は、戦地を離れて敵国人同士が向き合う機会を生み出す場であるが、収容所内の管理や新聞報道の取材に際して重要なのが通訳の存在である。1894（明治27）年9月22日付『海南新聞』記事では、捕虜の尋問その他の場合に「支那語（中国語）」学者が必要となり、陸軍省においても「支那語」学者を求めて採用する方針を定め、募集に着手したと伝えている。松山収容所でも開設間も無くして通訳の不在に悩まされており、佐世保にいる里見ヨシマサを何とか佐世保鎮守府から陸軍省で譲り受け留守第五師団から送ってもらっている²¹⁾しかし、「当地にて別に通弁を得れば直ちに販せとの師団の命なれども他に適當の通弁を得ず、但し守備隊の軍送に見込者二名ありしを以て試みたれども到底用を弁するに足らず、里見は頻に販国を急ぐにより代人を師団へ請求し置き²²⁾」とその窮状を伝えていた。しかも先の『海南新聞』の記事では、捕虜のなかには、北京語、上海語、満州語と言葉が異なる捕虜が含まれているように、清国は多言語国家であり、清国兵といっても様々なので、各種の「支那語」話者が必要だと報じていた。一方、同年9月28日の記事では、こうした「支那語」へのニーズに対して、松山市郊外梅津寺に住む黄檗宗の僧が読誦のために身に着けた唐音の知識を用いるべく収容所勤務の願書を出したとの記事もあり、外国語といっても、明治以降に広がっていった西欧諸語とは異なる語学の水脈が看取される。

実際、明治以前の漢学や唐通事の流れを汲む人々が通訳官として活躍しており、先に引用した「山越の捕虜廠舎」に登場する第五師団付通訳官^{さかき}彭城邦貞²³⁾もその一人であった。これらの記事に相前後して『中國新聞』でも「清国語通語者の紹介」とする記事が掲載され、²⁴⁾約30名の通訳官を紹介している。彼らの「清国語」習得ルーツを検討してみると、その2割弱がかつての唐通事の家

系出身者であり、幼少より言語の手ほどきを受けてきた人々と考えられる。こうしてみると唐通事の流れを汲む者それ自体は数としては少ないものの、外国語学校の教授等で果たした初期の役割を考えると、その齎した影響は明治以降にも窺い知ることができよう。もっとも、唐通事たちの習得していた言語は「南京官話」であって、明治以降に必要とされた「北京官話」ではなかった。それゆえ、初期の東京語学学校を担った唐通事たちも北京官話を学ぶと共に、1876（明治9）年以降に留学生が派遣され、現地で北京官話を習得した者たちが中国語教育の主流となっていく²⁵⁾このことを示すように、先に挙げた清国語通訳官のうち、およそ8割が東京語学学校（東京外国語学校の前身）で、9割に留学経験（官民双方）があり、興亜会支那語学校・日清貿易研究所で学んだ者も多かった。これらのことに鑑みれば、明治以降の中国ならびに中国文化・言語と日本との新たなつながりが広がっていた様子が見て取れる。

このように言葉の面をとってみれば、とりわけ外交、経済、教育の場面で「北京語」が重視されるようになったように、明治期には従前とは異なる新たな中国と日本との関係性が始まっていたといえよう。その他の、例えば文化やイメージの面ではどのような変化が生じていたのだろうか。当時の捕虜関連の新聞記事には、「豚尾兵」という蔑称が散見され、また収容所まで移送される捕虜に対して多数の観衆が「或は笑ひ或は嘲ける²⁶⁾」ように侮蔑していた様子も繰り返り登場する。また戦地における清国兵捕虜の斬首については先に触れたが、これ以外にも辮髪を切るなどの行為が行われていたことが知られており、さらには捕虜だけでなく、清国人一般についても無法で無礼で野蛮であるとする報道²⁷⁾もしばしば存在する。このことから、日清戦争時に清国兵捕虜及び清国人に対する蔑視感情が遍在していたことは明らかである。同時代の記事には、朝鮮及び朝鮮人に対しても同様の蔑視が示されており、またそうした感情が「素朴に」書き連ねられている。この差別感に共通するのは、清潔度、洗練度、遵法精神が欠如しているという見解であり、これらはいわゆる「文明基準」からしての蔑みであるといえる。一方、清国兵捕虜を怯懦として蔑む点には、捕虜となることそれ自体への偏見が指摘でき、これは、日本の「武士道」精神へ

の矜持と盾の両面を成していると言えよう。

清国兵捕虜および清国人に対して否定的な感情の存在が確認されるものの、しかし同時に、その背景にある中国文化への尊崇も見て取れるところもある。前章で引用した「山越の捕虜廠舎」記事にあるような、長建寺での捕虜の様子に文人画の趣を感じ取るあたりには、そういった調子が指摘できよう。また以下示すような広島での彭城通訳官と捕虜たちのやり取り²⁸⁾には互いに敬意をもって対峙している様子を窺い知ることができる。

囚虜等我文化を語る

彭城訳官は頗る漢書に通ず。囚虜等と時に殷周の昔を語り堯舜の政法を論ず。囚虜等其の博学に敬服し教を乞ふこと屢なり。訳官懇切に我邦語杯(など)を教ふ。囚虜等大に服し呼ぶに老夫子を以てするに至る。

知覚甚だ鋭なり

彭城訳官自著の日清會話篇を贈り頻りに片仮名等を教ふ。囚虜等皆な多少の文字あるもの、其の習得の速かなる驚くべきものあり。即ち昨今に至りては金、水、火鉢等のことを言ひ得るに至りたりと。

訳官の厚意に感ず

彭城訳官屢々彼等を憫れみ煙草、煙管等を贈る彼等其の厚意に感じ銅製の食器頗る見るべきものを返贈す。又た囚虜中の張鳳竹なるもの左の一詩を賦して贈りたり。

昔在平陽困我囚 今登広島樂無憂

一時武略現不尽 感君鴻慈惟心酌

囚虜等久しく交衣せず其の不潔なる言語に絶し且つ大に半風子を生じて其の痒さに閉口す。一日湯沐の際半風子を煎んことを乞ふ、訳官之れを許す。

□〔學，女，し，皿を併せた文字——梶原〕

囚虜等無聊に堪へず種々なる字を書し又たは学理を討究するを以て唯一の楽みとなす。一日□の字を書し訳官に解を試みられんことを乞ふ。訳官

頗る其の解に苦しむ。囚虜等笑て曰く、孔孟學を好むと。

ここに捕虜が謝意を示すに漢詩を贈っているが、この他にも例えば、樂述善が詠んだ漢詩そのものが紙面に登場し、彭城通訳官とも吟じている様子が折に触れて記事となっている。ところで、真言宗長者大僧正高志丈了と俘虜教恤使山縣玄海の両氏が収容所を訪問した際、筆談を行ったが、その様子と筆談の文章も記事として掲載されている²⁹⁾。捕虜たちと筆談をしたという記事は、他にも登場するそれであり、こうした点には、明治以前から続く中国と日本との文化的紐帯が反映されていると思われる。当時の『海南新聞』の紙面には俳句に並んで漢詩のコーナーもあったり、記事中も訳文なしに漢詩が掲載されたり、となお漢学的素養が存在していた時代の雰囲気が見られる。儒学、歴史、文学を通じた東アジア共通の文化圏が当時はおも存在していたと言えるだろう³⁰⁾。また1894（明治27）年11月15日の『海南新聞』記事（「支那人の料理と日本料理」）では、支那料理では必ずよく煮たり、炒めたりするのに対して日本の料理方法は粗略であること、例えば刺身などは生の食材を醤油にひたすだけであって、料理方法の進んだ他国からすれば実に野蛮な料理法であること、それゆえ、「料理の如きに至りては清国に数歩を譲るものと云ふべし」とあり、実際の清国兵捕虜が料理に対して見せる姿勢にも感心しており、「異文化」として新たに清国事情を知るに及ぶこともあったようである。日清戦争後に前線での体験談として清国での印象が語られた際、欠点とあわせて、煉瓦造りの建物が多いなどの「意外な」進んだ点が紹介されるといったこともあった。

捕虜をめぐる処遇やその報道をめぐっては、捕虜の酷遇や侮蔑にしばしば見られるように、文明と野蛮という対立軸をそのまま日本と清国（中国）という形で当て嵌めたり、武士道という新たな伝統の観点から怯懦な国という形で清国を蔑む者がいた一方で、明治以前の文化的紐帯から発する尊敬や、食や暮らしといったよりポピュラーで新奇な情報に興味と感嘆をもって接する者もいた。日清戦争は、日本が近代化していく中、西欧や東アジアとの関係を大きく変えるきっかけとなったが、捕虜をめぐるこれらの記事からは、東アジア内

部においても、中国と日本とのかかわりが転換期を迎えつつあった、その一端が窺える。そのような中であって戦地も含めた日本管理下にある清国兵捕虜、ならびに清国管理下にあった日本兵捕虜、これらの実相についてはなお不明な点も多い。これらの点についての本格的な検討を今後の課題として、ひとまず擱筆とする。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依った。

- ・適宜段落を整理し、句読点や中黒を補った。
- ・漢字は原則として新字体を用いた。
- ・同一資料内で表記が揺れている場合、編者が統一した場合がある。
- ・〔 〕および〔 〕の記述は、編者が付したものである。
- ・判読不能な語句は□で表記した。

【付記】

＊本稿は、科学研究費・挑戦的研究(萌芽)「近代日本の捕虜処遇と大正・昭和初期におけるその変容に関する政治史的考察」(研究課題番号：21K18418, 研究代表者：梶原克彦, 2021年度～2023年度), 科学研究費・基盤研究(B)「国際比較に基づく日本の総力戦体制の全体像の解明(1918-1945)」(研究課題番号：21H00681, 研究代表者：森靖夫, 2021年度～2023年度), による研究成果の一部である。

＊＊本稿は、拙編『『海南新聞』松山俘虜収容所関連記事集成 明治二十七年七月－明治二十八年十月』愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」, 2022年, の解説文に大幅に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1) 本稿は松山に設置された捕虜収容所という観点から日清戦争を取り扱うため、台湾制圧に至るその後の展開は同戦争の時期としては含めていない。台湾制圧に伴う捕虜の処遇に関してはまた別途考察の機会を設けたい。
- 2) 日清戦争時の捕虜管理一般に関して言及した先行研究として、長谷川伸『日本捕虜志』(時事通信社, 1962年), 吹浦忠正『捕虜の文明史』(新潮選書, 1990年), 檜山幸夫『日清戦争——秘蔵写真が明かす真実』(講談社, 1997年), 秦郁彦『日本人捕虜 白村江からシベリア抑留まで(決定版)上』(中公文庫, 2014年〔単行本は1998年〕), 森雄司「近代

日本における捕虜——日清、日露戦争と第一次世界大戦における捕虜取扱いの比較研究——』『中京大学大学院生物学研究論集』25 (2005 年), 内海愛子『日本軍の捕虜政策』(青木書店, 2005 年), 大谷正『日清戦争——近代日本初の対外戦争の実像』(中公新書, 2014 年), 中国語による研究として, 宗澤亞『清日戦争 First Sino-Japanese War: 1894-1895』(世界图书出版公司, 2012 年)がある。

3) 飯野信義「日清・日露戦争と捕虜の取扱い——併せて 国際法とシベリア抑留日本人捕虜との対比——」才神時雄『松山収容所——捕虜と日本人』(中公新書, 1969 年), 阿部広明「日清戦争と捕虜」『えひめ近代史研究』73, 2019 年。

4) 吹浦, 前掲書, 97 - 103 ページ。『海南新聞』の同記事では以下のようにブリュッセル会議の内容を紹介し, 捕虜の使役が認められていることを確認している。

(一) 捕虜は人道を以て取扱ふべし但し反抗の□為をなすときは苦痛を加へて必要な処罰をなすことを得

捕虜の動産は武器を除き収奪せらるゝことなし

(二) 捕虜は一定の範囲地より出でざるの義務を負ひ都邑要塞陣営其他の場所に拘置す。然れども保安の処置として極めて必要なにあらざれば監禁するを得ず

(三) 捕虜は戦場に於ける働作と直接の関係なき公の工事に之を使役することを得但し其使役を過度にし或は捕虜軍籍にある者なるときは其等級を辱しむべからず又然らざるものなるときは其官職或は社交上の位地に不相応なる業務に服せしむべからず。捕虜は軍衛の定めたる規則に従ひ私業を営むことを得

捕虜の工賃は日用の費用に充ることを得べく又放免の時迄之を預け置くことを得べし但し衣食等の費用は工賃より引去るべし

(四) 捕虜は決して戦闘働作の幾分に与ることを強制するを得ず

(五) 捕虜を得たる政府は衣食等を給与すべし

此待遇の情態は予め交戦両国間に約束し置くことを得若し此約束なきときは一般の原則として捕虜を得たる国の兵士と同一に取扱ふべし

(六) 捕虜は其拘置せらるゝ軍隊の法律軍紀に従ふべし

捕虜逃走を企つときは一樣論示したる上兵力を用ゐることを得其逃走せんとして果さゞりしものは直ちに刑罰を加へ或は嚴重なる監視に附することを得
一度逃走を完ふし其後再び捕虜となりたるものは前の逃走に就きての刑罰を蒙ることなし

(七) 各捕虜は尋問に対し姓名及び等級を陳述すべし若し之をなさざるときは其等級に対する待遇を受くるの利益を失ふべし

(八) 捕虜の交換は交戦両国の約束によりて定むべし

(九) 捕虜は再び軍務に服せざるの誓約をなさしめたる上放免せらるゝことを得但し本国の法律に於て誓約あるに拘らず従軍を強制するときは此限にあらざ
誓約放免を受けたるものは其本国政府に対し并に敵国に対し名誉を賭して誓約の事項を履行するの義務あり此場合に於ては本国政府は誓約に悖りて何等の軍務を求め

或は受くべからず

- (十) 擒虜は誓約放免を肯んじ又敵国政府は誓約放免の要求を容る、義務なし
- (十一) 誓約放免を受けたるもの其誓約に反し再び軍務に服し生擒せられたるときは擒虜の待遇を受くることを得ずして法衙に護送せらるべし
- (十二) 軍隊所在地にある其一部を組織せざる者例へば新聞通信員受負人等の如きは亦擒虜となすことを得
然れども此等の人々は相当官衙より免許状及同人たるの証明書とを下附して釈放せらるべし。

- 5) 1894 (明治 27) 年 9 月 18 日付『芸備日日新聞』では、東京帝国大学文科大学教授栗田寛 (国学者・歴史学者) の「降虜を処分するの方案」と題する論説が掲載された。以下の引用文にあるように、栗田は日本の歴史におけるその実例に基づいて捕虜の使役を主張しており、ここから当時の捕虜労働をめぐる言説は、必ずしもブリュッセル会議での決議にその根拠を置いていた訳ではなく、むしろ従前の捕虜観に依拠して展開されていた様子も垣間見える。「史を按ずるに、蝦夷を諸国に班ち、道を作り、軍に役せらるゝことあり、又韓人を役し池を作らしめられしことあり、今や軍国多事、水土運搬の事、日に繁くして千万の衆猶且乏しきを訴ふ、宜しく俘虜を□て、其勞を分たしむべし、此事にして若し機宜に適せずとせん乎、更にこれを全国の都郡に分ち、所在に使役し、志那池志那堤を築かしむるも、亦可なり、仮令此の如くするも、俘虜の白□なる、我用をなすこと甚だ大ならざるべし、然れども邦人の其状を目観するものをして、益々榮辱の甚だ懸隔なるを知らしめ、山村漁村に至る迄愛国報効の□横溢するに至らしめば、其利其益、至大至重と言はざる可からず、而して此一事必ずこれを能く施行し得可きを知る、帝国の財政如何に豊富なるも国民の度量いかに潤大なるも、今の時に當りて、豈に此無耻野蛮の民に許すに、坐食安眠を以てすべけんや」。
- 6) この点で以下のオピニオンが参考になる。「捕虜の虐待 事実を見つめ共有を 間部俊明」『朝日新聞』2018 年 8 月 8 日。
- 7) この事件は、『海南新聞』では明治 27 年 10 月 3 日に、『芸備日日新聞』では同年 10 月 5 日に報じられたものである。これらの新聞での報道によると、現地で日本管理下にあった清国捕虜が逃走を企て巡査の帯剣を奪ってこれを斬りつけ、暴動を起こし、その後、38 名 (『芸備日日新聞』では 40 名とある) の捕虜が斬殺され、さらに首を晒された。ちなみに国内ではすでに 15 年以上前 (1879 年) に梟首は廃止されていた。
- 8) 檜山、前掲書、116 ページ。
- 9) 「成歎駭陸戦の後報」『宇和島新聞』1894 (明治 27) 年 8 月 12 日。
- 10) 軍夫は民間人であり、輜重の運搬等に使役されることで戦争に従事していたが、日本軍はその不足に悩まされ、現地で日本人以外の軍夫を雇用したことも知られている。一方、軍夫の代替に捕虜が使役されていたことは、例えば、亀井茲明『日清戦争従軍写真帖——伯爵亀井茲明の日記』柏書房、1992 年 (オリジナルの写真集は 1897 年、『従軍日記』は 1899 年出版)、77-78、80 ページに写真機材運搬の話として記されている。

- 11) 参照、大江志乃夫『兵士たちの日露戦争——五〇〇通の軍事郵便から』（朝日選書、1988年）。吹浦、前掲書、157-159 ページ。吹浦忠正『捕虜たちの日露戦争』NHK 出版、2005年、217-255 ページ。
- 12) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争——帝国への歩み——』2003 年、刀水書房、37-39 ページ、では「俘虜のあつかいとて、後の日露戦争におけるロシア兵俘虜の取り扱いとはかなりちがうものがあった。清国俘虜に対する日本の態度は、本質に侮蔑をひめた憐憫であり、乱暴なものであった。それは清国とロシアに対する日本政府の接しかたの差を如実に示したものにほかならず、日清と日露の『勝利』がもつ本質をよく示している」との指摘がある。文明と未開のスケール上で、文明へ近ければ近いほどそれだけ一層尊敬と厚遇の対象となる力学は、清国兵捕虜とロシア兵捕虜の間だけでなく、のちにロシア兵捕虜とドイツ兵捕虜との間でも看取される。
- 13) ノーマンはその他にも日本に好意的な記事をしたためており（cf. Sara C. M. Paine, *The Sino-Japanese War: Perceptions, Power, and Primacy*, Cambridge University Press, 2002.）, そうした論考のいくつかを含む著作に、Henry Norman, *The peoples and politics of the Far East: travels and studies in the British, French, Spanish and Portuguese colonies, Siberia, China, Japan, Korea, Siam and Malaya*, New York, 1895, がある。
- 14) 1894（明治 27）年 10 月 29 日の『芸備日日新聞』に連載された同記事では、「仏蘭西と支那との間に起りたる戦争は互に残酷を極めたるものなりしが其残酷は最初支那人に於て之を行ひ後には報復上自然の勢に従ひ仏蘭西人に於ても亦之を行へり、仏蘭西人が支那人のために生ながら剥皮せられたることは余が曾て見たる所なるのみならず仏蘭西人も亦支那の俘虜と為りたる同胞が言ふに忍びざる□□及其他の苦痛を受けたることを目撃したるが故に支那人を生擒したる場合に於て仏蘭西人が最も単簡の応報を為したるは敢て驚くべきにあらず。余は茲に日本人を弁護するがため一事の記載し置かざるべからざるものあり、即ち日本軍は文明の兵にして其の敵手たる支那人の猛獯無法なることは恰も印度のアッチエー兵に異ならず大佐ラングは余が上文に引用したる会見の時に支那兵を評し支那軍をして其兵器を取らしむれば其大半は野蛮人にあらざるはなしと言へり。若も戦時通信員として将に出発する人々あらば余は此等の人々に向ひ支那軍に従ふの利あることを忠告せんと欲す其理由他なし、若も此等の通信員にして誤りて日本軍の手に陥ることあるも日本人は必ず相当の礼義を以て之を遇すべし」とある。清国兵の残虐性がフランス兵をして応報の措置をとらせ、また日本兵は文明の兵であるが故に捕虜等になってその管理下に置かれても安心であるという主張は、日本の清国兵捕虜の処遇にお墨付きを与える効果があるだろう。
- 15) 旅順虐殺事件に際して日本が行った欧米諸国に対する弁明工作については、大谷、前掲書、135-139 ページ、を参照。
- 16) 第一次世界大戦中における在日ドイツ人によるドイツ当局への働きかけについては、梶原克彦・奈良岡聰智「第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題（五）」『愛媛大学法文学部論集 社会科学編』51, 2021 年、参照。

17) こうした嫌疑を受けて逮捕・抑留されたのが、「シドニー号事件」に登場する莫鎮藩である。同行のアメリカ人2名と共に、1894（明治27）年11月5日にフランス船舶シドニー号で神戸港へ入港し、軍事物資移送・間諜の嫌疑で同船上で逮捕、神戸のホテル「宇治川自由亭」に抑留された。アメリカ人2名は解放されたが、莫は11日に広島へ移送され、同地の捕虜収容所の一つである瑞川寺に収容された。そこでは莫は一室に閉じこめられ、7名の監視者という厳重な管理下に置かれた（「清国人莫鎮藩（本市尾長村瑞泉寺に在り）」『芸備日日新聞』1894（明治27）年11月14日）。しかし『東京朝日新聞』（「清人莫鎮藩の事」1894（明治27）年11月17日）では、「其取扱は俘虜に勝り一層丁重を加へ彼自身も早起して歯を磨き髪を梳り香水を撒布して清潔を務め彼の俘虜将校に比して数等の相違あり、兎に角支那上流の人物と認められたりと、彼は到着の翌日即ち十二日大多和司令官出張して一度取調べたるのみにて其後は或る時は室内を散歩し或る時は英書又は漢籍を繙きなどなし居れり」とあるように、捕虜一般とは異なる処遇を受けていた様子が窺える。この後、12月1日に大阪に移送され（「莫鎮藩の護送」『東京朝日新聞』1894（明治27）年12月4日）、大阪俘虜第一廠舎（難波別院）で収容されたが（「莫鎮藩」『東京朝日新聞』1895（明治28）年2月13日）、翌明治28年6月28日に天津へ回送され、解放となったようである（「外務省より 清国人莫鎮藩携帯金請求其他に関する件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C 03023056800、密大日記 明治29年自1月至6月（防衛省防衛研究所）16コマ）。

解放後の彼の供述では「一步も出入することを准さず地に席して坐睡し積て風濕を受け両足腫潰し病を扶けて北京に来る」（同上、16コマ）とある。これに対して、第四師団では大阪での収容を振り返って「当地俘虜廠舎収禁中同人を酷待し又は所持品并に書類等を押収せしこと一切無之のみならず且つ其取扱に関しては特に一室を貸与し懇篤を以て待遇せし」と主張している（同上、4-5コマ）。両者の言い分は食い違っており、それゆえ先の『東京朝日新聞』記事が描いたように莫が厚遇されていたかどうかは判然としないものの、莫自身も日本側が兵を派遣し監視に当たらせたことに違和感をもっており、報道でも第四師団の処遇でも特に一室を供与していたことや、解放時期が他の捕虜と異なっていることに鑑みれば、確かに日本側の史料では莫は「俘虜」と呼称されてはいたものの、莫は民間人抑留者の位置づけに近かったと考えられる。「シドニー号事件」は戦時国際法の観点に併せて、捕虜と民間人抑留者という問題からも興味深い事例といえる。「シドニー号事件」に関する報道については、以下に詳述されている（ただし莫が広島から松山へ移送されたとは誤りだと思われる）。真貝義五郎「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）」と『シドニー号』事件：「バレット文庫」収録の『神戸クロニクル』紙ハーン論説の時代背景を見る』『研究紀要 人文科学・自然科学篇』（松蔭女子学院大学）34、1993年。

18) 「豚尾漢取押へらる」『海南新聞』1894（明治27）年8月8日。日本の商人に扮した清国人が広島から松山へ移動し、市内で逮捕されたという内容になっている。

19) この点については、先行研究でも説明は分かれており、収容先を長建寺のみとするものと、旧松山藩主の菩提寺である大林寺も含めて二つとするものがある。後者の説明を行っ

ているのは『愛媛県史』および阿部、前掲論文、である。しかし最初の捕虜 84 名が到着して間もない 1894（明治 27）年 9 月 19 日付の「俘虜景況書」では「俘虜廠舎は当市〔松山市——梶原〕外字山越長建寺に設く」（「別紙俘虜景況書並俘虜廠舎則則俘虜廠舎略図相添報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C 10060539900, 明治 27 年 編冊 各師団（防衛省防衛研究所）4 コマ目）となっているのに対して、当時の大林寺での収容状況について、管見の限り当時の状況を伝える新聞記事での言及が一切なく、史料的にも裏付けを得られない。一方、阿部はより細かな分析を試みており、『明治二十七八年戦役統計』下巻にある松山収容捕虜総数 96 名から、1895（明治 28）年 7 月 11 日付『海南新聞』記事「俘虜現在人員」に長建寺の収容者は 55 名とあることから、約 40 名が大林寺にいたとする見解を示している（阿部、前掲論文、11 ページ）。第一次世界大戦（日独戦争）時も 50 名程が長建寺に収容されていたことに鑑みれば、同寺院の収容人数という点からして、その可能性は高いといえる。だが、現在のところ長建寺での収容という記載のみ確認でき、他の収容場所が大林寺なのか、それとも別の場所なのか、さらには療養者の存在から病院も含めたなお複数の収容場所も考えられるが、状況は杳として知れない。1894（明治 27）年 9 月 22 日付「平壤の俘虜松山に送られん□す」では、捕虜受け入れに際して法龍寺および正宗寺を収容所とすべく準備を進めているとあり、両寺院は日露戦争では実際に捕虜収容所として利用されたこともある（この点では長建寺、大林寺も同様である）。いずれにせよ、本稿では史料で裏付けられる範囲で長建寺のみという記述を行っているが、上述の通り、『海南新聞』の 1895（明治 28）年 7 月記事にあった長建寺の収容人数からも、その「通常の」収容人数からしても、その時期には長建寺以外に収容場所があったと推測することは可能である。

- 20) 清国兵への関心は他の収容先でも確認される。例えば、大陸からの最初の移送地である広島では、清国兵捕虜が宇品港から収容先の瑞川寺や國前寺に移動するシーンが繰り返されるが、新聞報道では繰り返し見物人が押し寄せていた。1894（明治 27）年 10 月 16 日『芸備日日新聞』の「捕虜清兵（一昨日広島に到着したる）」では、「一昨夕俘虜到着の噂あるや本市大手町通は見物人山の如く集まり今か——と待つ程に俘虜百余名は兵士、憲兵、巡查等に警衛せられて惜々歩行し来る。見物人は男も女も老も幼も彼の豚尾の面を見てよい気味と叫ぶもあり、或は切齒扼腕して我帝国の大敵と大呼するもあり、或は手を拍つて陸軍万歳を三呼するもあり市中は一時非常に喧しかりし。一名の俘虜は余り市中の騒々しきに驚きて大手町二丁目に行倒れ一時は正気を失ひたるが暫らくして蘇生し歩むこと七八間にして又一丁目警察署前に仆れたり。依て腕車に乗せて第十一連隊營中に連帰たり」と見物人でごった返す街の様子を伝えている。この他『東京朝日新聞』によれば、1894（明治 27）年 10 月 16 日付「俘虜 大阪に着す」および「俘虜 大津に着す」、1894（明治 27）年 10 月 17 日付「俘虜清兵の到着」および「俘虜清兵」で、それぞれ大阪、大津、東京、名古屋でも人だかりができたことが伝えられており、おしなべて国民の間で清国兵捕虜への関心は高かったといえる。

- 21) 「捕虜通弁派遣の件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C 06021736800, 明治 27

年9月「乙 27 8年戦役日記」(防衛省防衛研究所)。日清戦争における通訳官のリクルートについては、岡本真希子「日清戦争期における清国語通訳官——陸軍における人材確保をめぐる政治過程——」『国際関係学研究』45, 2018年, を参照。

22) 前掲, 「別紙俘虜景況書並俘虜廠舎細則俘虜廠舎略図相添報告」7コマ目。

23) 彭城邦貞(星蟠)については、岡本真希子「明治前半期の「中国語」通訳・彭城邦貞の軌跡——日本・台湾のデジタル(數位)資料を用いて——」『国際関係学研究』47, 2021年, を参照。また彭城は、『独習日清対話捷徑』(鐘鈴堂, 1894〔明治27〕年)を刊行しており, 註30での記事に登場する同氏の教科書とはこれを指しているかもしれない。

24) 「清国通語者の紹介」『中國新聞』1894(明治27)9月22日。ここに掲載された通訳官の内, 唐通事系と位置付けられるのが, 呉泰壽(長崎県出身・内外綿花会社員; 呉永壽と兄弟, 参照, 岡本真希子「植民地統治前半期台湾における法院通訳の使用言語: 北京官話への依存から脱却へ」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)49(4), 2020年。以下, 岡本(2020)と略記), 額川^{えがわ}甲子郎(長崎県出身・大阪地方裁判所書記; 父額川重寛は東京外国語学校教授。参照, 岡本(2020)), 鉅鹿^{ちよ}赫太郎(長崎県出身・神戸地方裁判所書記; 参照, 岡本真希子「越境する唐通事の後裔・鉅鹿家の軌跡——対外戦争と植民地統治の中の通訳」『青山史学』38, 2020年), 吉島俊明(長崎県出身・無職), 鄭永邦^{ていえいほう}(長崎県出身・北京公使館書記生; 『東京外国語大学史』では, 「北の鄭永邦, 南の御幡」と称されていたとある), 呉永壽(長崎県出身・三井物産会社員; 呉泰壽と兄弟。興亜会支那語学校出身)である。

外交官系と位置付けられるのが, 高須大助(山口県出身・北京公使館書記生), 早水厂孔(京都府出身・京城領事館書記生), 山崎□造(茨城県出身・仁川領事館書記生), 天野恭太郎(長崎県出身・仁川領事館書記生), 横田三郎(大分県出身・元山領事館書記生; 外務省留学生, 外交官。参照, 対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』下, 1936年, 428ページ), 瀬川浅之進(岡山県出身・釜山領事館書記生; 外務省留学生, 外交官, 領事等を歴任), 大河平隆則(鹿児島県出身・釜山領事館書記生; 興亜会支那語学校出身。前掲『対支回顧録』418ページ), 加藤義三(東京府出身・外務属)である。

外国語学校関係者は, 大澤欽一(出身地不明・大阪控訴院書記; 東京外国語学校での北京官話教育開始に尽力した川崎近義の墓碑に他の門人と共に名を刻む), 谷信敬(栃木県出身・兵庫県属; 谷信近の弟。参照, 岡本(2020)。東京外国語学校出身, 参照, 前掲『対支回顧録』662-663ページ), 石原逸太郎(愛知県出身・長崎控訴院書記; 東京外国語学校出身, 長崎商業学校清語囑託教授のときに通訳官として従軍, のち外務省通訳官, 領事業務など。参照, 前掲『対支回顧録』714ページ), 谷信近(栃木県出身・□(福?)嶋屋支店支配人; 谷信敬の兄), がおり, 他の通訳官の多くも同学校の出身である。

興亜会支那語学校・日清貿易研究所関係と位置付けられるのが, 仁礼敬之^{にれいけい}(鹿児島県出身・両毛鉄道会社支配人; 著書に『北清見聞録』亜細亜協会, 1888年, があり, のち台湾で官吏。学友会の発起人。アジア主義者。参照, 富田哲「統治の障害としての「通訳」——日本統治初期台湾総督府「通訳」に対する批判——」『淡江日本論叢』23, 2011年), 宗

方小太郎（熊本県出身・日清貿易研究所員）、徳丸作蔵（熊本県出身・長崎県属；興亜会支那語学校出身で外交官）、御轡雅文（長崎県人・日清貿易研究所員；のち東亜同文館でも教鞭をとる）、草場謹三郎（佐賀県出身・活版業；日清貿易研究所、東京外国語学校出身）、^{ななさと}七里恭三郎（京都府出身・大阪朝日新聞社通信員；官吏。興亜会支那語学校で学ぶ）、中西正樹（岐阜県出身・漢口楽善堂；日清貿易研究所、東亜同文会設立に尽力、宗方らと知己であると思われる。参照、前掲『対支回顧録』288 ページ）、山本瀧四郎（岡山県出身・汽船東京丸事務員；興亜会支那語学校卒、参照、前掲『対支那回顧録』717 ページ）、吉田清揚（鹿児島県出身・汽船肥後丸事務員；参照、大里浩秋「宗方小太郎日記、明治 22-25 年」『人文学研究所報』（神奈川大学）40、2007 年、に楽善堂書房で働くとする。乙未会にも名を連ねる）。

その他に、山吉盛義（山形県出身・外務属）、瀬戸晋（熊本県出身・無職）、鈴木恭賢（鹿児島県出身・山師）、中島武（出身不明・東京地方裁判所書記）、榎本某（主審不明・横浜地方裁判所書記）、佐野尚喜（熊本県出身・米商）、鈴木行雄（熊本県出身・長崎地方裁判所書記）らがいる。

なお、通訳官は戦地にあっては斥候という役目を帯びて活動することも間々あったと思われる、通訳官がそうした潜入活動において捕縛されて処刑されたとの記事も散見される。

「征清殉難九烈士」のエピソードは著名なものであり、上記にもある漢口楽善堂出身の山崎^{こうきやう}羔三郎や日清貿易研究所出身の鐘崎三郎、猪田正吉ら 9 名がスパイ活動中に処刑された。

25) 中嶋幹起「唐通事の担った初期中国語教育——南京官話から北京官話へ」東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史』東京外国語大学、1999 年、855 ページ以下、を参照。

26) 「捕虜李準水」『芸備日日新聞』1894（明治 27）年 12 月 11 日。

27) 例えば「清国人の無礼」『海南新聞』1894（明治 27）年 8 月 19 日。

28) 「在広中の捕虜将校」『海南新聞』1894（明治 27）年 11 月 14 日。

29) 「真言宗長者俘虜に説教す」『海南新聞』1894（明治 27）年 12 月 4 日。

30) この点で、大谷正『兵士と軍夫の日清戦争——戦場からの手紙をよむ』有志舎、2006 年、および同「ある軍医の日清戦争体験と対清国観——渡辺重綱『征清紀行』を読む——」『専修法学論集』96 号、2006 年、での指摘は示唆的である。大谷は、福島出身の軍医渡辺重綱が日清戦争から帰国後にその体験を綴った歌日記『征清紀行』に清国への蔑視感がないことに注目し、「渡辺の日清戦争従軍記がステレオタイプの中国蔑視論に陥らなかった理由は、彼の人柄、中国文化に親しんだ学習経歴と教養の世界、複雑な境界人としての経歴と 60 歳という成熟した人格、そして擬古文の歌日記というメディアの特性が考えられる。彼のような清国観を持った日本人は、日清戦争当時まだ少なくともはなかった」と述べ、いくつかの要因に併せて漢詩、漢籍に親しみ、詩賦に優れた文人趣味の存在を挙げている（大谷、前掲論文、68 ページ）。